



ローカルを 求める人たち

文／窪田新之助

米国
食農紀行③

ワシントンDCのユニオンマーケット



働いているアベットさんと彼が作った新鮮な野菜

再開発に伴う食の変化

ワシントンDCは再開発の真つ只中にあつた。工事現場では大型のクレーンが空中を横切り、ダンプが進入していく。

開発により政府系の仕事が増し、新たな職を手にした人たちが首都に入り込んでいる。地価が高騰しているようで、通訳として同行してくれた30歳間近のマットさんは家賃が高くて生活が大変だとこぼしていた。こうしたなかで食と農はどう変わりつつあるのだろうか。ワシントンDCの日通り地区にバスで向かつた。

開通したばかりの路面電車が走る通りには、近年建てられたことが一目でわかる真新しい店が立ち並ぶ。路面電車の通りから一本なかに入ると、家々が側壁をくつつけた住宅街が広がる。母親たちは小さな子どもと家の前で遊び、老人はロッキングチェアに座ってゆらゆらとして過ごしているのだった。

こんな穏やかな時間が流れる日常を訪れるとは、10年前であれば誰も想像しなかつただろう。人種差別の撤廃のために尽力したことでノーベル平和賞を受賞したキング牧師の暗殺事件が1968年に起きてから、この地区は暴動で焼け野原になつた。その後もあらゆる犯罪の温床に

なり、うかつには近寄れないエリアだつたそうだ。

かつては黒人ばかりが住む場所だつたが、いまでは白人の姿もかなり見かける。ワシントンDCに居住して20年を超える通訳のビルさんは住宅街の様子を眺めながら、「以前であれば恐ろしくてここには来られなかつたね。でも、いまなら夜歩いていても平気だと思うよ」と教えてくれた。

そんな様変わりしている日通り地区の一角に2012年、話題の店がオープンした。飲食店を兼ねた大型の直売所ユニオンマーケットである。

この店が注目されているのは、出店者と投資家の出会いの機会を提供しているからだ。出店している農家や料理人たちは経営規模を広げることや独立した店舗を持つ夢を描いているが、手元には肝心の資金がない。このマーケットで自分の商品や腕をアピールすることで、自分たちの夢に投資してくれる金持ちを募っている。投資家にとつても、再開発が進む首都で食の新たなマーケットが生まれつつあるなか、事業的に可能性のある農家や料理人を探しているのだ。

フレッシュな野菜を
高くても買おう

もちろん、訪れる人たちの大半は

投資云々には無関心で、マーケットとしての魅力を感じている。筆者らが訪れた平日の昼時にも大勢の客が車で押し寄せていた。

まずは出店者に話を聞いてみた。ワシントンDCに隣接するメリーランド州の40エーカー（約16ha）の農園主として有機農産物ばかりを作るアベッド・アルマラさん（56）は、このオープン時から店を出して、野菜や果物を売っている。その理由について尋ねると、「最近、ローカルなものを求める人が多いんだよ。この辺りには収入が高い人たちが多いからね。彼らが求める価値ある野菜を提供していきたいんだ」と言う。では、その価値とは何か。買いう物に來ている客に話を聞いた。30代の



女性は、「値段はスーパーの品物より高いけど、フレッシュでおいしいからいいのよ」と笑った。ほかに質問した人たちもだいたい同じような答えだった。

浸透する ローカヴォアの動き

来客から話を聞いているうちに、よく耳にした単語がある。「LOCAL VORE（ローカヴォア）」だ。その意味するところは日本でいう地産地消。米国では同じ趣旨を持つ言葉として、たとえば「FARM TO FOLK」がある。ただ、そうした従来の言葉との違いはローカヴォアが距離の概念を取り入れている点だ。ローカヴォアについてインターネ



ワシントンDCにできたレストラン「POSTE」。庭で野菜を栽培し、収穫したら料理にして提供している。ローカヴォアの流れてこういう店もできている。

ットで調べてみると、この運動を始めたサンフランシスコ在住の女性4人が運営するホームページがあった。そこに書かれた説明によれば、積極的に購入する農畜産物を半径100マイル（約161km）圏内で育てられたものに限っているということだ。

ローカヴォアという言葉自体は、「地元」を意味する「local」に「vore」という接尾語を付けた造語である。voreというのは、「carnivore（肉食動物）」「herbivore（草食動物）」「omnivore（雑食動物）」など、「〜を食べるものたち」のことを指す。通訳のビルさんにローカヴォアが世間にどれだけ浸透しているかを尋ねた。彼は、見事に膨れたお腹が証

明するように食べることが趣味である。あちこちのレストランを巡り歩き、食の最新事情にはとにかく詳しい。おまけに子どもたちから新聞を精読しており、毎日3、4紙に目を通さないと気が済まないというほどである。そんな質問をするには最適なビルさんいわく、「そうですね、マスコミが使うようになったのはここ2、3年ぐらいでしょうか」とのことだった。

新しい部類の言葉ではあるものの、ローカヴォアはすでにマーケットを形成している。有機農産物の愛好家に多くのファンを持ち、小売業界で時価総額が世界トップ30に入る「Whole Foods Market（ホール・フーズ・マーケット）」だ。そのワシントンDC店ではローカヴォアを支持する人たちのための特設コーナーを設けている。

広い店内を回ると、とあるコーナーの棚の絵に100の数字が入った札がかかっていた。ガイド役の従業員は「ここから100マイル以内で取れたものに絞って陳列しているんだ」と説明してくれた。

ただ距離に限った点にローカヴォアの特徴があるなら、米国にはCSAという地域住民たちと築く農業の形態がある。その実例を見るため、ケンタッキー州に向かった。

畜産が鍵を握る農業経営

ケンタッキー州の中心地で野球のバットの産地として著名なレイビルから、車で東に向かうこと約15分。市街地からさほど離れていないのに、もはや現代的なビルは一切見かけない。打って変わってどこまでも続くのは、同州が「ブルーグラスの州」と呼ばれるだけに牧草地ばかりだ。そうした自然の景観が豊かな場所に、土地の名である「フォクス・フォロウ」を冠した農場は広がっている。

清掃が行き届いた玄関で出迎えてくれたのは農場主であるジェニー・ニュートンさん。この日の空の色をそのまま映したようなさわやかな青色のオリジナルTシャツを、彼女は細身の身体に涼しげにまとうていた。そのTシャツの明るさそのままの笑顔でもって、姉妹とともに経営するこの農場について軽快に語り始めた。

所有している土地は実に13000エーカー（530・5ha）に及ぶ。もはや見渡す限り自分たちの農場といった感じで、筆者らがいる場所からは緩やかな起伏の牧草地のずっと向こうに森が広がっているのが見えた。それだけ広大な規模でありながら野菜を作っているのはわずか6エ

ーカー（約2・5ha）だけで、残りについては家畜を放し飼いにしたり、飼料作物を作ったりしている。飼っているのは牛が270頭、豚が5頭、鶏が20羽である。

フォクス・フォロウ・ファームはその歴史が8年とまだ浅い。それ以前は数十年にわたって近くの農家に農地を貸していた。その農家は化学農薬と化学肥料を投じながら大豆や小麦、トウモロコシなどを作ってきたため、農地を戻してもらったときには土壌がガチガチに硬くなっているに驚いたそうだ。土壌学に詳しい人物を技術顧問に雇って相談したところ、返ってきた答えは「この土には生き物も菌もない。だから、まずは牛を連れてきましょう。とくに雌牛のふんはほかのいかなる動物のものより栄養が豊富ですから」だった。

その人物の説明によれば、放牧した牛はふんを落とす。牛はふんが落ちた土の上を歩きながらひづめで耕す。そうして土が生き返り、虫や動物たちも戻ってくるというのだ。そんな昔の話を振り返っている途中で、ジェニーさんはふと周りを見るのを促すように問いかけてきた。

「ほら、みなさん聞こえるでしょ。鳥たちのさえずる声が」
そう言われてみると、鳥たちがあちこちで弾むように鳴き声を響かせ

ている。見上げていると、鳥の群れがあちこちを飛び回っているのに気づいた。まるでレイチェル・カーソン著『沈黙の春』の世界である。「この農場には鳥の声を聞かないと芽生えない花があるのよ。バイオダイナミック農法ではそうやってすべての生命がかかりを持っている。いわば農場は一つの生命体。それぞれがなんらかの臓器であって機能を保持していて、いずれも健康でないと作物が満足に取れないようになってくるのね」

地域で農業を支えるCSA

では、こうした世界観のなかでどのように農業生産が行なわれているのだろうか。野菜を作っている6エ

ーカーの畑は次のように二つのプロラムに分けている。

一つは2エーカー（約80a）ある一般向け畑で、その収穫物は近隣で週2回開催されるマルシェで売るほか、レストランと売買契約を結んでいる。

もう一つは4エーカー（約1・6ha）あるCSA向けの畑。CSAというのは「Community Supported Agriculture」の略で、一般には「地域で支える農業」と和訳される営農形態である。具体的には、地域内で消費者が農家から自分たちで消費するための農産物を直接購入するシステムを指す。

ジェニーさんはなぜCSAを始めたのだろうか。次号で紹介したい。



ケンタッキー州で農場を営むジェニーさんとその畑